structure を明らかにすること，の三点である。

「説明されない美は，私をいらだたせる」と言ったのはエンプソン (William Empson) だが，この言葉はソネット 129 番を分析するヤコブソンに，より一層似つかわしいような気がする。そう言えば *Seven Types of Ambiguity* の初版の序に書かれているように，エンプソンが分析のヒントを得たのが，グレイヴス (R. Graves) らのシェイクスピアのソネット 129 番批評[7]であったことを思い出すなら，「新・批評」と構造主義批評との間に因縁めいたものすら感じられるのである。それはともかく，ヤコブソンの分析によって，ソネット 129 番が，ランサム (J. C. Ransom) の言うような「ただの 14 行の詩で，論理的な構造を持たない[8]」のでは決してなく，重層的な構造を持っていることが明らかになったのは事実だ。が，ヤコブソンの分析そのものが，彼がめざした程客観的で科学的だったかという問題になると我々はリチャーズとともに首を傾けざるを得ない。「詩の中心」の設定一つとっても言語学者ヤコブソンの恣意的な操作を否定することはできないからだ。だが逆に，客観的な分析をめざし，結局，分析者の主観性 (subjectivity) を拭い去ることのできなかった点に，彼の構造分析の欠点などではなく，むしろ文学作品の「したたかさ」を感じるのは筆者のみの偏見ではなかろう。

2　ヤコブソンの問題点

内藤亮一

詩は言語によって表現されているのだから，言語分析を詩に適用することは正当な試みであろう。しかし，それによって言語を詩たらしめているものを究明できるかどうかは，いわゆる詩学をも包括する言語理論を構築できるかということにかかってくる。そしてヤコブソンは言語学が言語を扱う以上は，それを目指さなければならぬと考える。[9]

ソネット分析もそうした言語学者ヤコブソンの姿勢のあらわれと見ることが

できる。ならば，そのヤコブソンの分析に，同じ言語学者の立場から問題点を指摘したポール・ワース (Paul Werth) の論評[10]は，現状における詩の言語学的分析の限界と可能性の一端を示してくれるものと思われる。

ワースの批評は，(1)ヤコブソンのとった分析方法そのもの，(2)その方法によって導きだされた型が必ず詩的関与をしているという前提の二つに向けられる。

ワースはまず文学的価値がほとんどないといわれる詩と新聞の切り抜きをヤコブソンの方法で分析し，両方にヤコブソンがソネットに見出したと同じような型があることを導き出す。そのことによってヤコブソンの方法では文学的価値も韻文性も診断できないことが明らかにされるわけだが，そのような結果が生じた原因を，言語自体の性質，詩的効果の問題とからめながら論じてゆく。

まずヤコブソンの用いた方法の中心となる二項対立そのものに問題点が二つある。一つは，二項対立の基となるあれかこれかの二項分類は言語学的に必ずしも認められていないこと。二つ目に，例えば口の中の舌の位置によって決まるといった外的正当性を持っていれば客観的に分析することができるが，語彙範疇等の場合，外的正当性は「現実の世界」，意味論の分野と接する。しかし意味の機能や範疇に関してはまだ体系的に十分理解され尽くしてないので，語彙範疇等を使って作られる二項対立は外的正当性を欠くことになり，自由に組み合わせることが可能となる。

このように二項原理そのものに問題がある上，二項対立をつくる為に必要な語，音素等の繰り返しは言語自体の性質上，必然的に起こるものである。つまり言語表現は無限につくられるが，言語の数自体は限られており，さらに音韻上の区分の数や続語範疇の数はさらに少ないからである。例えばソネットには普通 350 位の音素単位が存在し，英語の音素が 44 とすると，単純計算でも各音素が 8 ～ 9 回あらわれることになる。[11] 従ってソネット中に二項対立をつくりだす材料はふんだんにあるということになる。ならば分析者は自分の欲する型をつくる為に，それらを適当に組み合わせればよいのである。

次に詩的効果はどのような問題を含むのか。ワースは「効果」の概念は言語学にとってまだ主観的なものであること，言語学はそれを説明できる程洗練さ

れていないとした上で，効果の分析には三つの情報が必要であることを述べる。それは言語の規範，読者の反応，意味に関わるテーマ的内容である。また効果は三つに分けられる。意味的効果，強調効果，語調の効果。そして音韻，語彙，統語の言語単位と，単純な繰り返し，範疇の繰り返し，意味的な繰り返しが関連づけられ，音韻の繰り返しは主に語調効果に，語彙と統語の意味的な繰り返しはテーマと関係する。[12]

とすれば，音韻を主な分析手段とするヤコブソンにとって，語調が意味にとっても重要な文の場合に効力をもっとも発揮できるであろう。例えば 'I like Ike' の分析[13]や，平行性 (parallelism) が重要であるロシアの民衆詩[14]等。逆にソネット 129 番の場合には，テーマの一つと見られる時間の変動性，構文上の推進性が，厳格な対称構造の中に見失われてしまっている。

時間の変動性に関して，ワースは時間関係（現在・過去・未来）を意味上から考察することによって，時間がいったりきたりしていることを導く。[15] またスティーブン・ブース (Stephen Booth) は「行から行への読書経験」を重視した読みの分析をすることによって，変動性と推進性のテーマを引き出してくる。[16]

このことはヤコブソン分析の特質をさらに明らかにする。つまりヤコブソンの分析においては詩の動きというものがとらえられていない。これは方法の言語学的な側面に由来するのではない。なぜならワースは三流詩の分析で一応詩の前進性を導いている。[17] むしろヤコブソン自身が詩的言語の平行性を重視し，詩の動きという側面を重要と考えなかった為であろう。ロジャー・ファウラー (Roger Fowler) の言葉を借りれば，ヤコブソンは言語構造を空間的な型に変形したが為に意味と動きを失った，ということになる。[18]

一方，ブースが読みの時間性を主張した際，どのような分析方法をとっているだろうか。ブースによれば，読書経験は，論理，構文，音声，リズム等の型の重層性から生ずる。[19] 例えばソネット 129 番の推進性は，鎖状に絡み合う音声のつながりからも説明されるが，特に重要なのは構文であって，各行の終わりは様々な手段で完結性をもたされず，結果，読者は前へ前へと駆り立てられていくと説明される。[20]

ブースにおいてはヤコブソンと異なり読者の反応が先にあるという点で，分析結果と詩の印象にギャップが生ずるという危険は少なくなるが，テクストをその与えられた読者の反応を引き起こすだけのものに限ってしまう恐れがある。つまりテクストが具体化される過程の一つの例を記述したにすぎなくなる。ブース自身，自分の使う読者は偏見をできる限りなくしたものだが究極的には自分であると述べている。[21]

つまり問題なのは読者の反応はどこまでテクストに還元できるかということである。言い換えればテクストはどこまで読者を拘束するかということである。それを解くにはテクストを読むという行為に意識が向かわざるをえないだろう。

3　構造主義詩学の特質と限界

中　川　葉　子

「詩の文法的分析によって得られるものは，所詮詩の文法の域を出ない。」[22]
――1962年にヤコブソンがレヴィ＝ストロースと共に行なった，ボードレールのソネット "Les Chats" の分析に対して，ミカエル・リファテール (Michael Riffaterre) はこう言って批判した。そして更にリファテールは自らの文体論に基づいて，このソネットをあらためて分析している。フォルマリスティックな文法分析による詩の解釈に対して，読者の反応という概念を導入して反駁したリファテールのこの評論に，構造主義とそれを補う reader-response criticism の対照を見ることは可能であり，またそうされてきたのも事実である。しかし，リファテールの批評の軌跡の中でかなり早い時期に属するこの評論は，図らずも，彼がこの時期にはぬぐおうとしてぬぐいきれなかった構造主義の残像を露わにするものでもある。

ここでは，ヤコブソンとリファテールの，一見対立した立場に共通した批評態度を見出し，それを構造主義詩学の特質の一端として提示したいと思う。